

ドレスサーに腰かけながら、わたしは鏡をのぞき込む。薔薇色の髪も心なしか艶がないし、よく友人たちに雪のように白いと褒められた肌も、なんだかすすみがかって見える。

メイドが熱心に髪に塗る香油をすすめてくれるけれど、不調の原因はわかりきっていたので断った。

「奥様、最近どうも顔色がすぐれないようですわ。なにか気がかりなことでもございますか？ 旦那様も心配しておられましたよ」

旦那様、とメイドが口にした瞬間、心臓がドキリと跳ねる。

「そ、そうね、ギルベルトに相談してみるわ」

「ええ、ぜひ。旦那様ったらお仕事中でもしきりに奥様のことを気にかけているらしいですわ。早く帰ってリーゼロッテに会いたいって」

「もう、ギルったら」

わたしの夫であるギルベルトは、国中の貴族の子女が通う王立学院時代の同級生だった。祖先に王家に反逆した者がいたことで彼の家は長らく冷遇されていた。そういった境遇からか、理知的な印象を与える整った顔の青年で、成績も優秀だったが、好んで彼に関わりとうとする女子生徒はあまりいなかった。

しかし先王から現在の家柄より能力を重んじる現王へ代替わりがなされてから、官僚は家格よりも純粋な能力の方が重要視されるようになった。その影響で、ギルベルトはこれまでの冷遇から一転し、出世街道を歩んでいた。

いっぽうわたしは父母の庇護のもと何不自由なく学園生活を謳歌していたものの、卒業後数年で父が所領経営に失敗し、生活が一変した。多くの貴族令嬢が、親の決めた縁談に従うように、わたしも例外ではなく婚約者がいた。しかし将来を約束した婚約者は、苦しい時にともに歩んでくれる男ではなかったらしく、わたしの縁談は簡単にご破算になってしまった。

追い詰められたわたしは、一家は、有力な貴族とどうにか縁続きになり、負債を肩代わりしてもらうしかないという結論に至った。何人かの候補から、一番条件のよい相手を搾り込んだ。その相手は最近勢いのある自由都市で幅を利かせている金貸しを営む裕福な男性だった。しかしその羽振りのよさの裏で、苛烈な取り立てで評判はすこぶる悪い。おまけに大の女好きらしいと有名だった。

けれどもわたしたちを選択肢はない。娘を嫁がせる相手がたとえ、悪い噂が絶えない父親より年上の男でも、だ。そこまで思いつめたときに、学院で親しくしていたギルベルトが手を差し伸べてくれたのだった。

学生のときはうつむきがちだった彼は、りっぱな魔術士官の繊細な刺繍が施されたローブに身を包み、わたしを迎えに来てくれた。上級官僚になったギルベルトの俸給でわたしの家の借金を肩代わりしてくれたばかりか、結婚まで申

し込んでくれた。父と母は泣いて悦んで、なんどもギルにお礼をいつていた。

ギルベルトと婚姻の誓いを交わすことになったわたしは、嬉しさと同時に猛烈な申し訳なさが襲ってきた。

ギルベルトが、女性のことが苦手なことを知っていたから。

お気に入りのやわらかい素材の寝巻を身に着けて、お気に入りの甘い花の匂いがする香水を少しだけ枕カバーに振りかける。リラックスして眠れないからいやらしい夢を見てしまうのかもしれない。心と体を安心させてから入眠すれば、大丈夫なはずだ。誰もいない部屋で大きく深呼吸する。

「ふう、いい香り。それに、なんだか眠くなってきたわ……」

襲ってきた眠気に身を任せるように瞼を閉じる。わたしの意識はそのまま夢の世界へ旅立っていった。

――ぴちゃっ♡ぴちゃっ♡ちゅぷっ♡

胸に広がるじわじわと広がる甘い痺れと、どこからか聞こえる水音にわたしはうっすらと瞳を開けた。首筋を時折やわらかいものが掠める。くすぐったくて身をよじりながらおぼろげな意識でそれを注視すると、シルエットがぼんや

りと浮かび上がってくる。

「はあっ、リーゼロッテのおっぱいおっきいね……。乳首もつやつやしたピンクでかわいいよ」

寝間着から露出させられた膨らみの手触りを楽しむように揉みしだかれる。

男の手からこぼれ落ちながらむにむにと形を変える様を見ていると、ぞわぞわと背中が栗立っていく。

この低く甘い声には覚えがある。夫のギルベルトだ。わたしはなにも見なかったことにしてやりすごそうとまぶたを閉じる。ギルベルトはわたしの様子を気に留めることなく、胸への愛撫を続けた。時々サラサラとした青みがかった黒髪が鎖骨のあたりを掠めてくすぐったい。

「あっ♡はあっ♡」

ぬるりとしたものが胸を這う感触がして、おっぱいを舐められているんだと

わかる。焦らすように乳輪を舌でくるくるとなぞってから、口を大きく開いておっぱいごと乳首を口の中に招き入れられた。

「はっ♡リーゼロッテのちくび、おいしいねっ♡どんどんいやらしい形になって、舐めやすく尖って♡」

ザラザラした舌で乳首をひたすら左右に磨かれて、乳首を固くされる。吸いやすい勃起乳首にされてしまってから、一定のリズムでじゅっ♡じゅっ♡と吸い上げられて、わたしはぎゅうっ♡とシーツを掴んだ。

——これは夢。ギルがわたしのことを襲うはずない。

ギルベルトとは友人だが、彼は女性が苦手だった。昔一緒に勉強していると、軽く手が触れると大げさに反応して、両手を合わせて謝ってきた。

なんでも学園に入学する前にいた貴族の子女に魔法を教える幼年学校で、ひどくいじめられていたらしい。忌まわしい血が流れているはずのギルベルトが、自分より優秀なのが気に食わなかったのだろう。教材を隠されることは当たり前で、ひどいときは魔法使いにとって命よりも大事な杖をへし折られかけたこともあったらしい。

だからそれ以来ずっと女性が苦手で、誰かと付き合う自分を想像できないとギルベルトが漏らした時に、わたしは思わず茫然とした。わたしは告白もしていないうちに失恋してしまったからだ。

思わず固まってしまったわたしに、「リゼは別だよ」と慌てて断りを入れられたのも、気を遣わせたようで申し訳なかった。

だから、ギルベルトがわたしの寝込みを襲うなんてことはあり得ない。いつ



そのこと本人であれば、まだ望みがあるのに。わたしは罪悪感を覚えながら、どうにか安らかな眠りを取り戻そうと深呼吸する。

「ああ、ごめんね。リーゼロッテ、こっちも可愛がってあげないと」

「~~~~っ♡♡♡」

ギルベルトは唾液に濡れていない方の乳首を人差し指と中指で優しく摘まみ軽く揺さぶるように愛撫する。乳首が勝手に固くなってしまつて、夢の中なのに恥ずかしくて死んじやいそうだ。

「ん、すごいやらしいコリコリ乳首になった。リゼの乳首、おおきくてぷっくりしてて、んちゅっ♡、感じてくれるの？　かわいいなあ♡」

熱い吐息を吐いてから、ギルベルトはまたおっぱいにむしゃぶりつく。散々唾液を吸わされて、べとべとで柔らかくなった乳首が熱い粘膜に包まれる。唾液をたっぷり絡ませた舌で乳首をねっとり嘗め回されてから、じゅううつ♡♡

と口腔を窄められた。

「~~~~っ♡♡♡」

乳首啜えられて、口の筋肉をもどもぞ動かされる。まるで搾乳しているように柔らかい筋肉がねじれて、乳首を追いつめていく。

「♡♡♡ひっ……!!」

今夜はいつにも増してしつこく乳首をいじめられている気がする。自分の願望のいやらしさに困惑しながら、ぎゅうっと指が白くなるほどにシーツを握る。勝手に夢に登場させて、エッチな事させて、あまつさえそれで乳首アクメするなんて、ギルベルトに申し訳なさすぎる。それなのに乳首は先っぽビンビンでじんじんして、体中が熱くなってる♡

「♡♡♡んやっ♡」

「んちゅっ♡はは、もうイキたいの？ いいよ思いつきり乳首虐めてあげるか

ら乳首アクメしちやえ♡」

じゅるっ♡じゅるじゅるっ♡じゅるうっ♡♡♡

「ふっ♡♡あ♡♡〜〜〜♡」

腫れあがった乳首を根元から先っぽまで吸われて、そのまま思い切り口を窄められる。全体を圧迫するように刺激されて、まるで搾乳されているみたい♡強い電流が身体に走って、頭が麻痺していく♡

「〜〜っ♡♡」

アクメするっ♡夢の中で乳首アクメしちやうっ♡絶頂の予感に震えながら、ぎゅっ♡と唇を結ぶ。でもじゅるじゅる♡って膨らんだ突起を可愛がられたら、勝手に唇のいましめが綻んでしまう♡合わせた唇の隙間から、熱くしめった欲望しきった吐息が漏れる♡

「ふーっ♡ふーっ♡♡」

淫夢にのまれないようにと耐えようとするわたしをあざ笑うように、乳首への甘い責め苦はやまない。吸われていないほうの乳首にも手を伸ばされ、糸を寄るようにやさしくねじりながら上下に抜かれて、太ももがフルフル震える。

じゅぽじゅぽっ♡こりゅこりゅっ♡

違う刺激で左右の乳首刺激するのダメえっ♡

「♡♡♡ん♡♡♡♡♡」

もう声を抑えられなくて、濁った喘ぎ声を出してしまう。喉を晒して、まるでもっと舐めてほしい♡って媚びるみたいに胸を反らしてしまう♡ふりふり♡と胸を左右に振って、気持ちいい♡ってアピールしてしまう♡

「じゅるっ♡はは、かわいい♡ほらリーゼロッテ、ボクにエッチな乳首いじめられてアクメしろっ♡♡」

いつも穏やかなギルベルトとは思えないほど、乱暴な言葉と意地悪な声♡命

令されるのなんて嬉しくないはずなのに、きゅうっ♡とお腹の奥が狂おしいほど熱くなっていく。

じゅるじゅるるるうっ♡♡♡♡ぴちやっ♡れろれろっ♡♡じゅううう♡♡  
こりゅっ♡かりかりっ♡かりっ♡

「あひ        ~ ~ ~   」

わたしを追い詰めるように、ひたすら乳首を吸われ、爪で乳首をカリカリ引られる。乳首の芯に爪をねじ込まれて、湿った熱い肉に包まれて啜られるようにしゃぶられる。気持ちいい刺激をずっと与えられて、アクメしないなんて無理だった♡

[♡♡♡♡♡] [X] ♪♪♪♪

---

がくがくがくっ！ と腰が勝手に持ち上がって、ぷしゃっ♡って軽くお股から何か噴き出した。じわあっ♡と履いたままのショーツに潮が染みこんでいく。

きつと恥ずかしいシミができているに違いない。思わず足を閉じようとすると、骨ばった手が太ももをがっしりと掴む。

夢のなかでも潮吹きイキするなんて恥ずかしいのに、ギルベルトはぐちょぐちょになったクロッチをなぞった。布越しにゆっくり秘裂からクリを指で撫でられて、また軽くぷしっ♡と残った潮を噴いてしまう♡

「んちゅっ♡はは……乳首だけで潮吹きアクメしちゃったね♡エッチなシミになっちゃってる♡かわいい♡そんなに乳首かわいがられるの気持ちよかった？」  
ちゅぱっ♡と大きなリップ音を立てて、乳首から離れる。ギルベルトに解放されたのに、絶頂の余韻で身体がびくびくと痙攣したまま戻らない。

「ふふ、リーゼロッテの乳首、真っ赤なグミの実みたいになってボクの唾液でテラテラ光ってる。いやらしいなあ、また舐めたくなっちゃった」

ギルベルトはわたし乳房の手触りを楽しむようにやわやわと揉みしだきなが

ら、ぐいっと持ち上げる。そしてまた唇を寄せて、いったばかりの敏感乳首を舐めはじめた。

「ひゃんっ♡」

調教済のコリコリ乳首を優しく舌で撫でながら、ギルベルトの手がお腹から太ももへとすべっていく。いったばかりで敏感だからか、骨ばった手に撫でられる感触にも身体が大げさにビクビク♡って震えてしまう。

「ふふ、リーゼロッテのふとももやわらかくて気持ちいいね♡あったかい♡ああ、リーゼロッテの身体はどこをさわっても素敵だ」

肌を堪能するようないやらしい触り方で円を描くように撫でられて、ぞわぞわと背中が栗立ってしまう。ヒクヒクと蜜壺がふるえて、とろりと蜜が流れ出てしまう。だめなのに、こんなことをさせちゃいけないのに。触ってほしくてたまらない♡ショーツの中が蒸れてしまってるのを感じる。汗と、潮に愛液が

混じったいやらしい欲情した女のおい♡

少しでもずらされたらメスのおいがして、期待してるのがバレちゃう♡耐えないといけないのに、太ももの内側の皮膚が薄い敏感な部分や、足の付け根なんて触られちゃったら勝手に腰がくねくねと動いてしまう♡

「あれ、リーゼロッテったら腰動かして、もしかしてここも触ってほしいのかな？」

「っ……♡」

骨ばった手がショーツと太ももの境目に触れて、びくっ♡と腰が揺れる。

「すごいなあ、びしょびしょだよ♡濡れてピッタリくっついて、エッチなクリの形浮き出ちゃってるね♡」

愛液と潮がたっぷりしみ込んだクロッチ部分を人差し指で上下に撫でられる。びくっ♡と膨らんだクリトリスの形を確認するように、輪郭を確かめられる。



ふに♡ふに♡って大きさを確認するように軽く愛撫されて、また愛液が染み出す。指の腹で膨らんだ豆の中心をかすめられて、わたしの意志とは関係なくびくっ♡と腰が震える。いやらしい肉豆に、血が集まっていくのを感じる。ドキドキしながら待っていると、グイ♡と布が食い込んだ。ショーツをぐいっとな引っ張られたのだとわかる。布が食い込んで膨らんだクリを押し潰す。ぐいっ♡ぐいっ♡とクリを布を擦るように引っ張られて、それだけで腰が甘く痺れてしまう。



「こうするとリーゼロッテのかわいいお豆さん膨らんでるのよく見えるよ。ボクの小指、いや中指の先くらいはあるかな？　なんだかさつきよりおつききになってるな。リーゼロッテはクリよしよしされる本当に大好きなんだね♡」

ぶくっとした肉豆の形を浮き彫りにされてから、布越しにクリの先っぽを力

リカリ♡カリカリっ♡とやさしく引っかかれる。

「~~~~♡♡♡」

「あれ、リーゼロッテ。またクリトリスおっきくなった♡カリカリってされるの、気に入ったんだね♡」

胸の突起を吸われながら、秘豆もつま先でいじめられて、弱いところたくさんいじめられる♡♡エッチな願望を抱いているなんて認めたくないのに、どっちもわたしの大好きな弱いところだ♡たとえ夢の中でも大好きな人にそんなことされたらすぐ気持ちよくなっちゃうに決まってる♡

「ふ、うづ~~~~っ♡♡♡」

勝手に腰がへこ♡へこっ♡と動いてしまう。自分から弱点を擦り付けて、もっといじめて♡っておねだりしてるみたい♡ギルベルトの指にクリトリスを押し付けるように勝手に腰が浮いて前後にダンスする。じゅわっ♡じゅわっ♡と流

れ出てくる愛液を布が受け止めきれなくなったのか、ショーツ越しにクリを弄られているはずなのに、くちっ♡くちゅっ♡という粘っこい水音が響いてしま  
う。

「すごっ、リーゼロッテったらエッチな腰振りダンスしてるっ……！　ぷっく  
りクリトリスもっと触ってほしいんだね♡かわいいよ、リーゼロッテっ！」

「っ……っ……！？」

突然全身に、甘い衝撃が走る。ギルベルトに下着越しに浮き出たクリトリス  
を摘まみあげたのだとわかった。足がつったみたいにピンっ♡って伸びる。ま  
ずい。もう少しでイってしまう♡イキたいのに、ギルベルトを汚すことなんて  
できない♡でももう限界♡クリいじめられておっきいアクメキメたい♡

相反する心に惑いながらふーっ♡ふーっ♡と荒い呼吸をする。ダメなのはわ  
かってるのに、エッチなお豆さん触れると逆らえなくて、腰がずっと止まらな

い。

「あれ、リゼ。イキそうなの？　はは、ボクの指でクリぐにぐにされて、おマシコからダラダラ涎だして気持ちよくなってるんだ。最高にやらしいな♡」

いやらしい腰振りダンスを続けるわたしに気をよくしたのか、ギルベルトはきゅっ♡きゅっ♡とリズムカルに二本の指で揉みしだく♡愛液でベタベタになったショーツは刺激を軽減なんてしてくれない。それどころか、びったり張り付いていることでより摩擦がなくなっているのか、より気持ちよくなってしまう♡

「はっ♡あ☒っ♡♡♡」

腰が勝手に突き上がって、限界が近いことをギルベルトに知らせてしまう♡勝手に夢の中でギルベルトを汚している罪悪感があるのに、耐えられない♡むしろ後ろめたさがあるせいか、オナニーより敏感に快楽を受け取ってしまう。

いや、夢のなかでわたしの願望をギルベルトに叶えさせているのだから、これもある種の自慰なのかもしれない。わたし、いまギルベルトでオナニーしちゃってる♡ギルベルトでおっぱいいじりながらクリオナしちゃってる♡

「☒♡ん☒♡」

「はあ♡リーゼロッテ、かわいいよ♡もうイキそうなんだね♡いいよ♡かわいいい♡♡♡をいやらしいメス汁まみれにしてイっちゃえ♡」

「♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

くちっ♡ぐちゅっ♡くちゅっ♡

ベトベトのショーツの布ごと巻き込むように淫芽を指の腹で円を描くように押しつぶされる。ぐり♡ぐりっ♡と肉豆をお腹側に押し込まれて、腰がまた高く持ち上がる。

「ふっ♡ふ——っ♡ふ——っ♡♡づ——っ♡」

荒い息を吐いて、獣のように濁った声を上げる。必死にイキ我慢するけれど、ぐりゅんっ♡と淫芽を強く押しつぶされて、頭の中が真っ白になる。

「リゼ、がまんしないで♡ほらっ♡イケッ♡イケっ♡♡」

「っっっ♡♡♡」

歯を食いしばって、お腹に力を入れる。でもギルベルトの追い詰めるような指使いは止まらない♡淫芽をきゅうっ♡って摘まんで上下に乱暴に抜き始める。ベトベトの布と一緒にクリを根元から先端まで磨かれて、何度も何度も甘い痺れが脳天を駆けあがっていく。

気持ちいい♡気持ちいい♡もうこれ我慢するのむりい♡

「☒——っ♡♡んぐっ♡んあ☒♡♡♡」

喉を晒して、はしたなく背中をのけ反らせながら、ぶしゃああっ♡ぷしっ♡しっ♡♡♡と恥ずかしい潮をショーツにしみ込ませてアクメする。クロッチ部

分ではもう受け止めきれないのか、潮が逆流し始めて腰をじわっと濡らしているのを感じる。小さいころにお漏らししたときの感覚にそっくりで、恥ずかしくて情けないのに、ヒクヒクと肉襞が震えてしまう。

「あれ、リゼ。おマンコぷっくりしちゃってるね♡まだ満足できないんだ♡」  
「っっ♡」

びしょびしょの布越しに、肉厚な唇がわたしの肉ビラを食む。スンスンと息を吸い込むような音が聞こえて、頭の芯までゆだってしまう。

――は、恥ずかしい。おマンコの匂い、かがれてるっ♡

「はあっは――っ、リーゼロッテのショーツメス汁が染みこんですっごいエッチな匂いする。蒸れた甘酸っぱい、いやらしい匂い♡発情してるメスの匂

いだ♡」

「~~~~っ♡♡」

下着越しにスンスンと匂いを嗅がれて、形のいい鼻梁がぶっくりと膨らんだクリトリスを掠める。顔を押し付けてぐりぐりと左右に動かされると、その振動でまた軽くイキそうになってしまう。

「あっ♡やあっ……!!」

眉根を寄せて唇を引き結んで必死に耐える。指が白くなるくらいにシーツを握りしめて身体を震わせていると、突然熱い秘部に冷たい外気が触れた。ギルベルトがショーツを引き下ろしたのだと理解するころには、蒸れたメスの匂いが自分でもわかるくらいに部屋にただよっていた。夢なのにこんなところまで再現しないでいいのに、と恨めしく思う余裕はない。

「すっごい♡リゼのおマンコ濡れ濡れだよ♡飾り毛もエッチなお潮とメス汁で



ベトベトになってはりついてる。クリもさっきイカせてあげたなんてわかんないくらい、また真っ赤に腫れてるね♡おマンコもひくひく♡って口開けてまだ足りないっていつてる♡」

両手でぐいっ♡と恥部を広げられて感じていることを刺激されると、ひくん♡ひくっ♡と蜜口が切なく震えて、とろりとした粘っこい愛液が垂れていく。

「はあっ♡リーゼロッテは気持ちいいって言うってくれないけど、ここはすごく素直だね♡かわいくて舐めてあげたくなっちゃうな♡」

ギルベルトの熱っぽい吐息が露出した粘膜に触れる。熱く湿り気を帯びた舌がひとつ♡と膨らんだ肉ビラに押し当てられて、染み出した愛液を啜られる。

「や、やだっ、う、うそおっ」

「んちゅ……はあっ♡リーゼロッテのおマンコおいしいよ♡甘酸っぱくて、

ちよつとしょっぱい♡」

ぴちゃっぴちゃっ♡♡じゅるっ♡♡れろおっ♡♡♡♡

「ひうっ♡ああっ♡♡」

肉厚な舌が愛液まみれの肉ビラをねっとり舐め上げていく。舌の表面が、何度も上下に往復していく。熱い吐息がクリトリスに掛かるのがわかる。思い切り、膨れ上がった肉芽を舐めてほしい。今夜こそは淫夢にのまれまいと決意したのに腰が勝手にくねって、ギルの舌を求めてしまう。熱い舌で思いっきり膨れ上がったクリトリス押しつぶしてほしい♡

「はあっ♡はっ♡」

へこ♡へこ♡と腰を突き出して、クリトリスを舐めてほしいと下品にアピールする。ギルベルトが笑う音がした。わたしの浅ましい姿に興奮したのかもしれない

「ふふ、リーゼロッテったら腰振っておマンコ舐めおねだりしてる♡やらしいなあ♡さっきいったばかりなのにパンパンに膨らんで熟れてるこのいやらしいクリトリスいっぱい舌でかわいがってほしいの？」

熱くぬるついたものがクリトリスにぴとっと押し付けられる。そのざらついた感触だけで腰が太げさに跳ねる。こふりと膣奥から本気汁が溢れて、きゅうっ♡とおマンコがうずく。それなのにギルベルトの舌はやさしく添えられたままで、わたしの期待を満たしてくれない。

自分から腰を突き出せば、途端に先ほどまで添えられていたぬるついたものが離れていく。舌先を追っていたら、自分でも意識せずにブリッジするように腰を差し出してしまふ。無様な体勢でおねだりしてるのに、ギルベルトのおあずけは終わらない。どうして夢なのに焦らされないといけないのかと少し恨めしく感じてしまふ。

「はは、リーゼロッテ。ボクにおマンコなめてほしいの？　いつも太陽みたいに笑ってるキミが、ボクにおマンコ舐めてほしくて自分でクリ差し出してるんだ。最高だよ、すっごく興奮する」

ぐにっ♡とギルベルトが指でクリを優しく押し上げて、かろうじてクリトリスを守っていた包皮を剥かれてしまう。ビンっ♡と完全に勃起した淫芽が外気に晒された。たくさんかわいがられたそこはどんな刺激でも敏感に反応する。冷たい空気が触れる感覚すら気持ちいい。限界まで焦らされたせいで、感覚が過敏になってしまっている。これじゃ、またすぐにイってしまう♡おかしくなるほどもちよくされてしまう♡♡

あの感覚を思い出して、ヒクヒク♡と期待にクリトリスが震える♡

「ふふ、かわいいズル剥けクリトリスだね♡真っ赤に充血してビンビンに勃起してる♡このかわいいお豆さんボクのくちの中に入れて可愛がってあげたら、

きつとリーゼロッテはすぐにイっちゃうね♡」

吐息交じりに囁かれる言葉に、脳みそが蕩けていく。あたたかくてやわらかい口のナカに包まれて、吸われて、あの長い舌で愛撫されたらっ♡おかしくなるくらいきもちよくなっちゃうにきまつてる♡

「っ♡はっ♡はあっ♡」

荒い息を吐きながら、へこっ♡へこっ♡と腰を振る。

「はは♡もう耐えられないんだ♡いいよ、そのかわいなお口でどうしてほしいのか言ってみらん？」

わたしは固く閉じていた瞼をゆっくりと持ち上げる。その瞬間にギルベルトの黒曜石のような瞳に捉えられて、まるで暗示にかかったかのように引き結んでいた唇が解かれた。

「はあっ♡ギルのくちでっ♡わたしのよわよわな剥き出し勃起クリ、いっぱい

おくちでいじめてっ♡お潮ぴゅーっぴゅーって噴かせて、い、イカせてっ♡」  
淫らな言葉を口にして、盛り上がったしまった肉土手をぐいっ♡っと左右に  
広げる♡むき出しのよわよわクリトリスをギルベルトにさらけ出す♡ぴよこっ  
♡とそこだけ小さく盛り上がった赤く腫れた突起が、ぴくぴくと震えていた♡  
現実のギルベルトにこんなことをお願いしたら幻滅されてしまうかもしれない  
い。けれどもいま目の前にいる彼は、わたしのどんないやらしい願望もかなえて  
くれる。

その証左のように、おマンコを恥じらいもなく広げて、赤くぬるついた粘膜  
までギルに晒しているわたしに、ギルはごくつと生唾をのんだ。欲情されてい  
るのだとわかると、もっと大胆になってしまふ。待ちきれなくてヘコヘコと腰  
を突き出すわたしは、まるで品な踊りを披露しているかのようにだった。

女の子に興味がないはずのギルは、わたしを食い入るように見つめて、べろっ

♡と舌なめずりする。

「ははっ♡いいよ♡我慢できなくなっちゃったの？　じゃあ今夜もリーゼロッテの舐め犬になってあげる♡」

今夜も、ということばがかすかに引かかる。けれどギルベルトが迷いなく恥丘に顔を埋めたと同時に、クリトリスがあたたかいものに包まれ電流が全身を駆け抜けた瞬間、わずかに感じた違和感なんてどうでもよくなってしまった。

「っっっ！！　♡♡」

ぢゅううっ♡♡と思い切りクリトリス吸われてながら、尖らせた舌先で敏感な神経の塊を圧迫される♡待ち望んだ刺激に目の前がチカチカする♡お腹の奥から湧き上がる熱が、一気に開放されたいと駆け上がってくる♡

「っ♡♡ひぐっ♡♡ゝゝゝゝっ♡♡あ☒♡♡だめなのっ♡♡ギルにこんなことさせちゃめなのっ♡」

「んちゅっ♡はは、リーゼロッテ、イキそうなの？　いいよ♡ボクのお口のナカで潮吹きしてイっちゃえ♡」

「♡♡っ♡でりゅっ♡でちゃうっ♡」

わたしの絶頂の予感を感じ取ったギルベルトが、さらに追い打ちをかける。唾液をたっぷり含ませた口腔に包まれて、クリトリスごと愛液を啜るように口腔を振動させられる。あたたかい粘膜に包まれて、ブルブルっ♡ってクリトリスを震えさせられたら、もう耐えられない♡

「♡あへっ♡♡くっ♡♡イっちゃうっ♡♡っ♡♡♡♡♡」

ぷしっ♡とギルベルトの口腔で潮吹きしてしまう。ぷしっ♡ぷしゅっ♡って断続的に吹き出る潮を、ギルベルトが喉仏を上下させて飲み干していく。潮を全部搾り取るようにクリの亀頭を舐めまわされる。

「♡ひっ♡♡ほっ♡♡っ♡♡♡♡♡」



もう白旗を上げて潮吹きしてるのに、ずっと刺激されてイキっぱなしでアクメが止まらない♡潮吹きも勢いがなくなってるチヨロチヨロ♡って無様なおもらしみたいに透明な液体を垂れ流す。

「は——っ♡は——っ♡も、でないっ♡ギルっ、もうでないからあっ♡」

涙まじりに訴えてようやく、ちゅぽんっ♡と音を立ててギルベルトの唇が離れる。解放されてもずっとクリがじんじんしてお腹に熱がとぐろを巻いている。突き上げていた腰をゆっくりとベッドに下ろす。ビクビク、と震えながら息を整えていると、ギルベルトがやさしく頭を撫でる。

「はあっ♡かわいかったよりゼ♡気持ちよくて蕩けてる顔のリゼ、ボク大好きだな♡」

「う、うん、きもちよかった♡わたしもギルにくんにされるのしゅきい♡」

蕩けた思考回路で反射的に愛を囁けば、ギルベルトは顔じゅうに唇を押し当

てて、最後に最後に唇をついばんだ。

「んむっ♡」

「リーゼロッテが望むなら、またいっぱい気持ちよくしてあげる♡今日は疲れちゃったでしょう？ ゆっくりおやすみ」

瞼にキスをされると、ぷつと緊張がほどけるように眠くなる。夢のナカのはずなのに、また眠るなんて変な感じ。でももう瞼が重くて開けられない。

「ギル……、おやすみ」

わたしがなんとかそれだけ告げると、ギルベルトが頭を撫でたような気がした。